

五味川純平

人間の條件
中

五味川純平

人間の條件
中

三一書房

人間の條件 中

一九七三年七月三十一日 新装第一版発行
一九七七年七月三十一日 新装第十刷発行

著者五味川純平

©一九七三年

発行者竹村一

印刷所暁印刷株式会社

製本所株式会社鈴木製本所

発行所株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話東京〇一九一〇三三三一〜五番

郵便番号一〇一

振替東京九一八四一六〇番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

人間の條件

第三
第四部

第三部

「そこに待っとれ」

中隊内務掛の日野准尉は、梶を事務室に残して、隊長室に入って行った。梶は不動の姿勢で立っていた。

「休め」がかからないのだ。暫くして、日野は戻って来たが、直ぐに机について、書類に眼を通しはじめた。梶二等兵など眼中にない。

そばの、真ッ赤に燃えているストーブの上で、湯沸しから湯が吹きこぼれて、盛んにやかましくはじけた。日野が、じろりと梶を見上げた。何故湯沸しの蓋を取らないのか、お前は。そう云いたそうに見えた。梶は肚の中で苦笑しながら、不動の姿勢を崩さなかった。

営庭を、初年兵が軍歌演習で練り歩いていた。蜚声を張れるだけ張り上げて、歌は戦陣訓の歌であった。感傷的なメロディに、力み返った蜚声がなじまない。

日野が書類に顔を向けたまま云った。

「休め」

聞えなかった。

「何でありますか！」

「休んでよし」

湯のはじける音がうるさいのだ。梶は一度正しく休めの形になってから、湯沸しの蓋を取った。早く要件を終って欲しかった。冬の日はまだ直ぐ暮れる。窓の外の灰色の空が、暗く変色しつつある。初年兵は忙しいのだ。ここで遅らされる数分の時間は、消灯時刻までどうしても取り戻せないことになるだろう。

ようやく日野准尉は梶の方に体の向きを変えた。股を開いて、脚を投げ出して、さも面倒くさそうに訊いた。

「お前は幹部候補生を志願していないな？」

梶は不動の姿勢に返った。

「しませんでした」

「何か特別の理由があるか？」

梶は答をためらった。日野の、額だけが白く、眼から下が浅黒く灼けた顔を見ていた。その顔は、軍隊の暴風に十年近くも晒されて来た顔であった。知識人の手間のかか

る、曲折の多い考え方など、受けつけられようとも思えない。

「……特別の理由と云っては、ありません。不適格だと思ふからであります」

「どういう点が不適格か、云ってみろ」

「将校になりたくない気持であります、准尉殿」

「その気持の内容を訊いておるんだ」

気持の内容など、お前にわかるか。梶は、肚の中で言葉が重なつた。即答は出来ない。ひとこと間違えれば大変なことになるだろう。

「……漠然とであります。准尉殿」

「理由は漠然としているが、将校になりたくない気持だけは明確だと云うんだな？」

日野が、何か、これからが楽しみだというような笑い方をした。

「地方ではとほけて済ますときもあつたかもしれん。軍隊ではそれは許されんのだ。俺の前では、そんなことは通らんと思え」

「……一分ほど時間を頂きたくあります、准尉殿」

「よし。やる。新城、もつと石炭を入れろ」と、事務室の端の机にいる新城一等兵に日野が命じた。新城はのろろと立って来た。日野に背を向けたときに、新城が梶を見て幽かに笑つた。図太く構えろ、梶、あわてることはない。梶と同じ内務班から事務室勤務に出ているこの三年兵の一等兵は、動作を極度に緩慢にして、梶のために時間を稼いでやろうとしているようであつた。

「中隊初年兵の幹候志願有資格者二十三名中、志願していないのは、お前と、お前の班の小原だけだ」

と、日野が、新城の後ろから云つた。

「隊長殿は全員に志願させるよう云っておられる。戦局多端となれば、将校の数が必要となつて来ることは、お前に説明するまでもないだろう？」

「わかつております」

「小原は盲目に等しい近視眼だから、不問にするとしてもだ、梶、お前は身体強健だ。術科も優秀だと橋谷軍曹が云つておる。橋谷はお前の射撃と手榴弾の能力を自慢しているぞ。学歴も充分だとすれば、何が将校不適格か？」

適格だ、俺は。梶は体を熱くして思った。誰よりもおそ

らく俺は適格だ。俺は兵隊を愛する将校になるだろう。それが不適格なのだ。理由を云えというのか。理由なら幾つもあるぞ。第一に、俺は老虎嶺の二の舞をやりたくはないのだ。老虎嶺での俺の立場こそは、完全に下級将校ではなかったか。第二に、俺は軍人が嫌いなんだ。将校という奴が一番嫌いなんだ。殺人命令の伝達機関に過ぎない月給取がだ。第三に、俺は帰りたいんだ。帰って俺自身の意志で生活したいんだ。第四に俺は仕事をしたいんだ。はじめからやり直して、やり抜いてみたいんだ。俺は憲兵隊でぶちのめされたが、それほど立派な仕事をしたわけじゃない。それを、今度こそは立派にやり了せたいんだ。第五に、俺を要求しているのは軍隊じゃなくて、美千子なんだ。おわかりですか、日野准尉殿。俺はあんたの前では、単なる一個の二等兵だ。消耗品だ。郷軍五百万個のうちの一個に過ぎない。しかし美千子にとっては、お互にかけ替えのない人間なんだ。わかるかね、その意味が、わかるかね？

梶は美千子の匂いを思い出そうとした。帰って来る、と、約束したのだ、生き直すのだ、と。そう自分自身にも誓ったのだ。匂いを思い出したかった。別れるときに貪った美

千子の首筋の仄かな匂いでもよかった。髪の毛の匂いでもよかった。思い出したかった。ここでは、軍隊特有の汗臭い皮革の匂いと、新城一等兵がいまぐればかりの石炭のガスの匂いしかなかった。

「お前達が地方で勤め上げた地位と基礎を失いたくないという気持は、わからんこともない」

と、日野がまた云った。

「しかし、それはお前に限らず、誰しも同じことだ。補充兵役出身の有資格者は、はじめのうちあまり積極的に志願したがいなかった。その間の事情を俺が知らないとも思ふか？」

日野は、だらしなく開いていた脚を、今度は高々と組んだ。

「一期検閲が終わったら、補充兵は召集解除になりはせんかと、お前達は空頼みしていたろう。あさましい根性だ。解除どころか、いつ動員になるかもしれん情勢にある。それが、ようやくわかりかけて来たらしい。みんな諦めて、志願して来た。これがまた小汚ない根性だ。幹候教育期間中は戦線へ動員されずに、後方に置かれるのを当て込んでの

話だ。しかし、それもいい。演練を重ねているうちに、そういう地方人根性は鍛え直される。そうやってみんなどうにか一廉の軍人になるんだ」

日野は隊長室のドアの方へ流し目をくれて、小鼻のあたりで幽かに笑った。幹候出身で実戦の経験のない中隊長工藤大尉に対する軽蔑らしかった。

「いまもってお前が志願を頑強に拒否するからには、理由が何かなければならん。どうだ？」

日野の眼つきが俄かに底光りを増していた。

「……兵隊として卒伍の中にある方が、気が楽であります」
梶はそう答えた。智慧のない話でも、将校になりたくないの一点張りで行くより他はない。日野が異にかけようとしているように思えてならなかった。

軍歌演習はもう終っていた。冬空が黒い夜を下ろしはじめている。

「内務掛准尉というものはな、梶、兵のことは何でも知っているのだぞ」

気味の悪いほど穏やかな声であった。

「知っていて、お前に尋ねるのだ」

知っているのだろうか！ 梶はじりじりと追いつめられているようで、苛立つて来た。あの老虎嶺の斬首事件に関する一幕は、憲兵隊から詳細な通報が来ているに違いない。日野准尉の手許にある兵の身上調書の梶の欄は、朱線で埋まっているだろう。美千子からもさりげなく書き送って来ていることだ。「……渡合さんがおみえになって、その後どうかとお尋ねでした……」字句は簡単でも、内容は複雑だ。美千子は憲兵軍曹渡合の眼の中で、嫌悪感に慄えただろう。

「入隊以前のお前と、今日の梶二等兵とは別個の人間でなければならん」

日野がそう云った。

「お前も、その決心でここに来たはずだ」

「……はい」

「優秀な素質を持っているにもかかわらず、将校不適合と称して拒否するには、何か特別の意図を秘匿しているものと判断せねばならんが、いいか？」

追いつめられた。巧妙に逃げを打つ必要があった。梶はストープを見た。ストープは景気よく燃えていた。梶は新

城の方へ眼を移した。新城は机から顔を向けて、じっと梶を見守っていた。

梶は乾いた唇を湿した。かまうものか、云ってやれ。こいつは兵隊から叩き上げた古狸だ。将校を軽蔑している男だ。

「自分の考えでは……」

と、云い出した。

「将校は心身共に兵よりすぐれていなければなりません。

兵よりも苦難に耐える身体と兵よりも卓越した技能精神を持って、絶対に信頼される指揮官でなければ、兵に死地へ赴く命令を下す資格を持ちません」

「そんな指揮官はいないよ」

と、日野がにが笑いを洩らした。

「いてもいなくても、令典範に明示してあります。作戦要務令通則の第六に、指揮官ノ決心ハ堅固ニシテ常ニ鞏固ナル意志ヲ以テ之ヲ遂行セザルベカラズ決心動揺スレバ指揮自ラ錯乱シ部下従ヒテ遲疑ス、とあります。自分はしばしば決心が動揺することをよく知っています。歩兵操典綱領の第十には、為サザルト遲疑スルトハ指揮官ノ最モ戒ムベ

キ所トス。是此ノ両者ノ軍隊ヲ危殆ニ陥ラシムルコト其ノ方法ヲ誤ルヨリモ更ニ甚ダシキモノアレバナリ、とあります。自分は、軍隊を危殆に陥らしめる危険を、あらかじめ避けたく思います。これが、理由の一つであります」

日野は梶から視線を外さなかったが、その色がきびしいものでなかったのは、少しばかり憚りたからである。なんとまあ、ペラペラと暗誦する奴だ。赤い奴は頭がいいというが、ほんとうかな？

「それから？」

「半年や一年の短期教育で立派な将校が出来るとは思いません」

と、梶は、日野准尉の反応を窺った。これは准尉の心情の一端に確かに命中した。日野准尉は幽かに笑って、うなずいていた。日ごろから、駆け出しの将校など屁とも思っていないのだ。梶はそれを見て取っている。

「准尉殿のように経験を積んだ上で、将校としての自信が出来れば、なるかもしれません」

なんと自分自身が、不思議なくらいであった。

「まだあるだろう？」

日野は追及した。面白い兵隊だと思った。型が変っている。ちょっとした骨もありそうだ。

「それだけでは、俺が納得して隊長殿に報告出来んからな」

まだあるどころか、こちらが将校連中に訊きたいくらいだ。何の目的で将校になって、何の目的で兵隊に死の命令を下すのか、と。それを本気で信じてやるほど、阿呆なのか。阿呆でなければ、それをやる根性の底は一体何なのだ。俺はもう絶対に老虎嶺の二の舞だけはやらないぞ。

「将校は、矛盾を意識しないような人間でないとダメなん」

新城が愕いて顔を廻したのが見えた。日野は、面白そうに、皮肉な表情をしていた。

云い過ぎたかな？ 梶はその感じを繕うために、急いで云い足した。

「その意味は、兵隊を勤め上げもしないで兵隊を指揮者として掌握出来ると思うには、よほどに自信が強いのか、単純でないと出来ないということです。自分には、その自信も単純さありません。理由は、それだけです」

こいつは存外したたか者かもしれない。日野はそう思った。一歩間違うと危いことを承知の上で云っているのだ。手に負えない兵隊になるかもしれない。もう暫く監視する必要がある。

「ずるい奴だ、お前は」

と、冷たく笑って云った。

「何のかのと理窟を云いおって、結局、早く帰って、女房と寝たいんだろう」

梶は急に全身の力が抜けた。確かにそうだ。いま、これほど痛切な真実は他になさそうであった。

「女房と寝るのは、将校になっても出来ることだぞ、試験はどうせ一期検閲以後で、まだ時間がある。よく考えておけ。もういい。帰れ」

梶は上靴で床板を鳴らし、節度をつけて十五度の室内の敬礼をした。

「梶二等兵帰ります」

出口のところで、もう一度敬礼するときに、日野が云った。

「明日の手榴弾の中隊対抗は、自信があるか？」

「……あると思います」

「思います、か。頼りない奴だ。しくじってみろ、橋谷にどやし上げられるぞ」

日野はストープを抱き込むように、股を開いてそう云った。

2

梶が事務室から出ると、直ぐに、新城一等兵が石炭バケツを提げて出て来た。

「いいかげん気を揉ませる奴だな」と、笑った。

「他に受けようがありましたか？」

と、梶は新城の穏やかな眼の色を見た。

「わからんね。睨まれていることだけは忘れるなよ。睨まれても、俺のような万年一等兵の瓢箪鯨なら、大したことはないがね。梶は補充兵の最右翼だ。色のついた奴が最右翼だと、人事掛は困るんだな。なんとかボロを出してくれ

んことには」

梶は貯炭場の方へ新城について行った。

「明日の手榴弾は頑張って点を稼いでおけよ。いまんとこ、梶は、射撃と手榴弾と学科で身を支えているようなもんだ」

「……わかっています」

梶が低く呟いた。

「梶は緊張して隙を見せないというやり方ではじめたんだから、それを続けて行くよりしようがないぞ。俺がぐうたらでやって来たから、いまさらどうにもしようがないのと同じだ。弛むと、やられるぞ」

「わかっています」

梶はもう一度呟いた。俺とこの人とどっちがやりいいだろう？ 新城は実兄が思想犯に問われて刑務所に服役しているという理由だけで烙印を捺されている。あらかじめ最も程度の悪い兵隊として予約されていたのだ。新城にはこれという特技がない。そういう男がいくら努力してみても、無駄なことである。軍隊とはそういうところだ。梶は手榴弾を六十四メートルも投げる肩を持っている。投げて

みたら、そうだとわかったまでのことだが、それが珍重が
られている。梶はまた、右眼視力二・〇、左眼一・五の視
力を持っている。三百メートルの射程で、五発全弾命中、
うち三発が握り拳大の面積に集中したということが、小銃
班長橋谷軍曹を驚かせもしたし、喜ばせもした。これも、
射つてみたらそうなたままでのことだが、それが「兵隊と
して優秀な素質を持っている」ことの、根拠の一つになっ
ている。怪しい経歴の持主だが、初年兵としては抜群の技
倆の持主でもある。なるほど、中隊人事としては、困った
ことに違いないのだ。いまのところ、梶は専ら肉体的条件
によって危険から守られている。けれども、何か蹟きが来
たら、おそらくそれまでである。緊張を続けて行く他はな
い。

「もう行った方がいいぞ」

と、新城があたりを見て云った。

「俺とお前が話すのを喜ばない奴が多勢いる」

梶はうなずいた。

貯炭場の上に、夜空が圧しかぶさろうとしていた。風が
北から吹きはじめた。夜になると、これは正しく刃物にな

る。闇の中からいきなり肌へ斬り込む怖ろしい刃物であ
る。

「寒くなりますね」

梶は新城から離れた。暗くなりきらないうちに、小原を
手伝って、防火用水を汲み替えておかねばなるまい。編上
靴の手入れも。班内の拭掃除も。何から何まで。事務室で
空費した時間の穴が待っている。

3

零下三十二度、と、午後八時の掲示に出ていた。明け方
まで気温は刻々に下るだろう。北風になぶられて闇の中で
電線が唸っている。ときおり、それが咽び泣きに変る。す
ると、兵舎の窓を目貼りした紙がかほそい慄え声を立てて、
貰い泣きする。寒々としたわびしい音楽である。ソ満国境
に近い酷寒地で、夜ごと、それが兵達に一日の終ったこと
を告げる。

梶は毛布の中に疲れた体を伸ばして、緊張を弛めた。長

い、寒い一日だったが、やるだけのことは規則通りにやっ
たと思った。古兵から咎められるような手落ちはなかった
はずである。もう一度ふり返ってみよう。

新城一等兵が云った通りなのだ。ほんの僅かでも隙を見
せてはならない。銃の手入れは？ 官給品の員数は？ 私
物の整頓は？ 編上靴の手入れは？ 班内の清掃は？ 古
兵の洗濯物は？ ベーチカの灰は？ 防火用水は？ 軍人
勅諭と令典範の暗記は？

手ぬかりがなければ、早く眠るのだ。明日が来る。疲れ
が残ってはいけないのだ。

梶は足が冷えて眠れなかった。日夕点呼後に舎前の雪氷
を割ったのが祟ったらしい。毛布の中で足を擦り合せなが
ら、風の声を聞いた。何か恨みがましいその声が、綿々と
訴えている。聞くまいとしても、耳について連想を誘い出
す。はじめは、漠然と、想像の視野が涇てるあたりに美千
子の姿が佇んでいる。遠いのだ、ここからは。千五百キロ
も雪の曠野をへだてている。一日一日遠くなる感じがす
る。いつか動員下令となつて、南の海へ運ばれて行くだろ
う。そしてとうとう帰れなくなるかもしれない。もう美千

子とは会えないだろうか。

忘れません、老虎嶺の二百余日の倅せとその哀しさは。
美千子からの何度目かの便りにそうあった。御手紙を下さ
い。あなたの苦しみを美千子も分け持つことが出来ますよ
うに。

記憶は耐え難いやるせなさだけを生むようである。梶は
日野准尉の言葉をそこだけ鮮かに思い出した。なんのかの
と理窟を云いおつて、結局、早く帰つて女房と寝たいん
だろう。

その通りです、准尉殿。帰りたいのです。寝たいので
す。触れたいのです。感じたいのです。いま美千子もこの
風の音を聞いているだろうか。どのようにして独りで寝て
いるか。何を感じ、何を心に温めているだろうか。美千子
は瘦せはしなかったか。あの屹り立った胸は。あの豊かな
腰のまるみは。それは、あのように揺れ、このように動い
た。いつも梶と美千子の喜びのために。

梶は美千子にまつわる微細な動きのはしばしまで思い浮
べようとした。そうすればするほど、とりとめなく捉まえ
どころなく、美千子の傍は遠のいて行くように思われた。

胸の中で血だけが虚しく騒いでいる。

遠くで、大砲を撃ったような音がした。広漠とした湿地帯に張りつめている部厚い氷が裂けて、夜陰を慄わせる音だ。

梶はそつと隣の寝台を見た。小原はまだ寝入っていない。終夜灯の陰気な灯明りでは、瘦せこけた病人としか見えないその小さな顔が、右に左に僅かに動いている。眼鏡を外しては殆ど何も見えない眼を天井の梁木のあちこちに向けて、ときどき、深い吐息が洩れる。

梶より二つ三つ齡上の、地方新聞の記者をしていたこの男は、妻と老母との折合がうまく行かないのを歎いている。「俺は一人息子なんだ。おふくろっ子でね。おふくろが齡を取ったから、早く女房を貰え貰えと云うんだ。自分の方でそう云っておいてだよ。貰ったら、急に女房を目の仇にしましたんだよ」小原は梶にそうこぼしたことがある。一人息子の母親とは、たいていそうしたものである。

「召集が来たとき、俺のたった一つの気休めと云えばね、俺がいなくなりや、二人がどうにか仲よくするだろうと思つたことだ」事実はそうはならなかった。妻と母親の双方

から互に相手の苦情を書き送って来るのである。虚弱な体質で、軍務の重みにさえ耐えかねている小原は、二人の泣きことを読まされるたびに眼に見えて弱って来る。「俺は病氣になって死んじまいそんな気がするんだよ」と、梶に云つたこともある。いつ帰れるという当てもなく、激しい練兵と冷酷な内務班の生活で心身をすり減らして行くくらいならば、いっそのこと死んだ方がいい、と、弱氣がそう思わせるのかもしれない。

「毒だぞ、考えるのは」

梶はそつと呟いた。自分自身にも云い聞かせたのだ。小原は幽かにうなずいていた。考えたところでどうなるものでもない。不気味に鎮まり返り、ただ夜な夜な風が泣き、氷が裂けてしじまを破るこの国境地帯に、ひとたび非常ラッパが鳴り響けば、多分それで一切が終ることになる。けれども、また、それだからこそ、未練がましく考えあぐみ、幾度も幾度も思い返すということには、切実な意味があるのかもしれない。

古兵の誰かがもういびきをかいていた。歯をキリキリと噛んでいるのは、猥談でいつも古兵を嬉しがらせている二